

北越

譜二編三卷

目録

- 鳥追槽（覽列上下）
- 地獄谷の火
- 無縫塔
- 幸賀の哥
- 菅神御傳畧
- 異獸
- 弘智法印
- 白鳥
- 浮嶋
- 美人
- 雪霜
- 越後の人物
- 北高和尚
- 逃入村の不思議
- 田代の七ッ釜
- 火浣布
- 土中の舟
- 兩頭の蛇
- 石打明神
- 蛾眉山下の標準

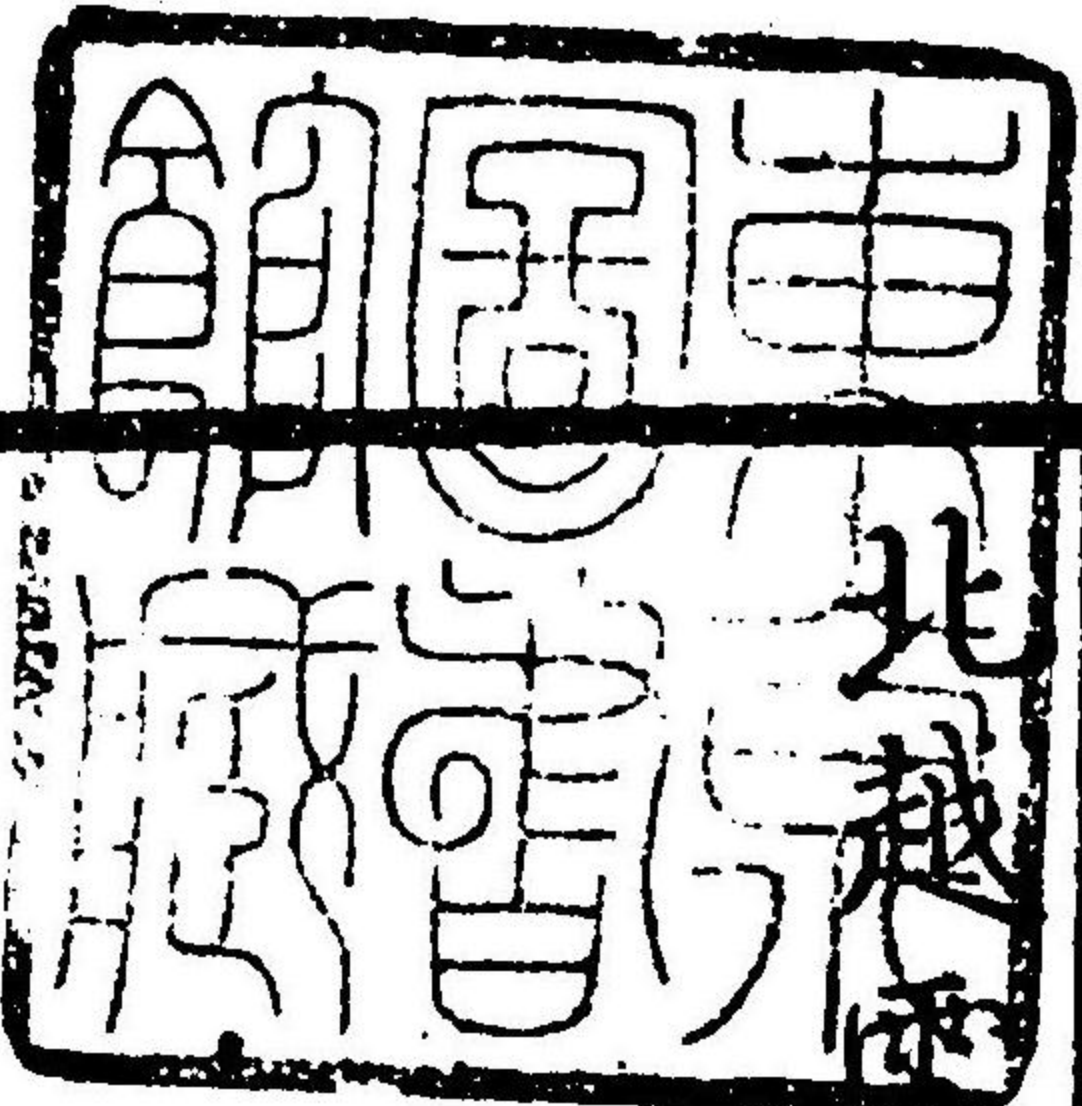
○ 苗場山

○ 鶴恩小報

通計二十三條

○ 三四月の雪

右異歌以下分けて四の巻とす



北越聖譜二編卷三

越後 鈴木牧之 編選

江戸 京山人百樹 増修

○ 鳥追櫓

農家中正月の行事鳥追との事あり此事諸國なりも
あまた其あを処其国小よりてさぬぐある事ハ諸書ハ散見せり江
戸の鳥追とりハ非人の婦女音曲をを女太夫とて木綿の衣服を
うろくく着あハ顔を粧ひ編笠をか帽り三弦ハ胡弓をを
あつを賀唱ををしろくくハ門を小立り錢ををふ此事元日よ
りちどめ松の内ををりとを松ををてもありくハ我
越後小正月の十五音をちどめ鳥追とて去年より取除を
た山を雪の上をを以て高さ八九尺あるハ一文余ハ高さ小

此書の前編上の巻雪中の火といふ條は六日町の穂積西の山手小
 地中より火の燃事あるをいふが地獄谷の火の更なるをいふ也
 又ふふの。もと我越後小名高くと不思議なかどりの蒲原郡
 如法寺村百姓莊空門七夫附孫六がが家小あり地中より燃事火ハ普く
 人の知る所もども其火より盛火のハ魚沼郡のらちの小千
 谷の在地獄谷の火あり唐土の是を火井といふ近來此地獄谷の家
 を作り地火を以て湯を燗し客を待たし浴させしも夏秋のそとめ
 まづハ遊客多し此火井他国中より越後小多し先年蒲
 原郡の内或家より井を掘り其夜医師來りて井を掘り更
 を聞家小飯る時挑灯を井の中へ入るとのありやう井を見り立
 きりて井中より俄火をいび火勢きん燃あがりけり近
 隣のものども火事ありてをきつけ井中より火のものを見て

此井を掘りぬる此火ありとて村のものども口を主人を罵り恨
 けり主人も此火をおそとて埋るると此地火ハ陰火といふの
 如法寺村の陰火も微風の氣いづる小燐燭の火ををるる風氣平小應
 て燃事陽火を得ざる燃事寛文のむし在右空門が如法寺村庭あり韃を
 はらひする時より燃事むしとて前より井中の火も医者ガ挑灯を
 井の中へいびぬるこの陽火もいふとていふとて又頸城
 郡の海邊小能生宿といふ北陸道の官路あり此宿より山平小入る更
 二里をり小間瀬口といふ村ありこの農家小地火をいふとて更如法寺村
 の地火小同くとて此より用水小多しとて所より旱のをりハ山小乾
 井を掘り小堀り水を得る更ありある時井を掘り横小なりし時穴の窟
 きをててたぬ小炬を用ひる小陽火を得る陰火忽ち狀あがり人
 是為小焼死しけるとて是等の更どもをいふとて越後のうちめ地

火をいざと火脈の地まぐらに陽火を得て一々發せざるもまうら

百樹曰余小千谷のありし時岩居余小地獄谷の火を見せん先
社友五人を伴ひ用意の酒食を美奴二人小荷り余余京水と同
行十人小千谷を去るる西の方・新保村・敷川新田の村々
を歴く一宮との村の山間の兼畦曲節と菰の抵り行程一里半
可あり是日いと爽快晴く村落の秋景百逞目を奪ふさて平山
一ツを踰る坂あり別地獄谷の徑あり坂の上より目を下せば
一ツの茅屋あり是本文のりる混堂あり人々坡の半からりし時
茅屋の樓上小四五人の美婦ありははのく檻よりて遙かこの
人々を指しありありははのく檻よりて遙かこの
あるひハ手をあげてまわつ四面皆山あり老樹鬱然とて

中、小個美人を見ることが愕然と是狸のありをんばうらみは狢ろん
とのひげは岩居友とらと相顧手を拍て笑ふこと小千谷の下こ
町との野の酒樓小居と酌杯の舞妓とあり岩居朋友と計り
竊小此招きまて余小真をん為とを渠ハ狢ろんありと岩居
小魅ささるあり已小地獄谷からり皆樓小のやと岩居ハ余と
京水とを伴ひてかの火を視せしむとをて菰谷ハ山櫻あり
ゆゑ櫻谷とよびるるを地火あるをりて四方四五十歩をひらき
平坦の地とあり地火を借りて浴室とあり人の遊ぶ所とせしとて
櫻谷とよびるる処地火のため小地獄とよぶこと花のさき
うらぐら・さくらの火を視る小一ツの浅き井を作りたるその井中
より火の燃る事常の湯屋の火よりも盛りの上小釜あり一間
四方の湯槽あり細き管ありと右の山の清水を引き湯槽小

と湯の槽の四方の溢るる湯を以て此湯温くを熱くす
 天工の地火盡る時ゆひと人作の湯も盡る期あり見ゆも清潔
 ある事ありて此混堂の續きて厨処あり灶あり宛あり地
 火を引く物を煮薪小同し次の中の間あり床の下より竹筒を出
 し口ありすを銅を鉗て火を出し上より自在をさげ此火
 小酒の烟をさしある茶を煎夜に燈火とをさえ熱此火を視ふ
 筒をさすこと一寸さすの上の燃る扇ありび陽火のさす小
 消る筒の口か手をあててさす風をさすものも数燭の
 火を翳せば忽然とさすものごとくさす如し主の筒が白の火
 夜に昼よりも燥烈く人の顔青くさすことりの筒が妻水のうら
 よりゆゆる火を見せゆきんとて混堂のうらうら小僅の山田あり所
 かりり田の水の中かすし湯をさすゆゆる火をさすし

小水中の火燐燭のもの如し左邊からうらうら此火のやうゆゆる
 処ありありあり夜にさすことり火をさすものも数燭を
 りの余が江戸の目より視る所とて奇妙あり唐土あり此火
 を火井とて博物志或は瑯琊代醉小見えたる雲臺山の火井と
 此地獄谷の火のごとくさす事の大なる此谷の火小勝らば
 唐土と日本とをさすことり火井の最第一とあり是を見たる事
 越後の一奇觀あり唐土の火井の在る所北の蜀地小属と日の本の
 火井も北の越後小在り自然の地勢小よるやん●さて一人の
 哥妓榜上ふらふてさすことり小岩居を呼ぶとて樓小のさす
 余は京水とて小此湯小浴を樓上ふ早く三階をひらき浴
 をさす楼小のさす既小杯盤狼藉たり婢媼哥妓袖をさす
 素手弄糸朱唇謡曲地陵頻伽の声外面如芥の色奥を透る

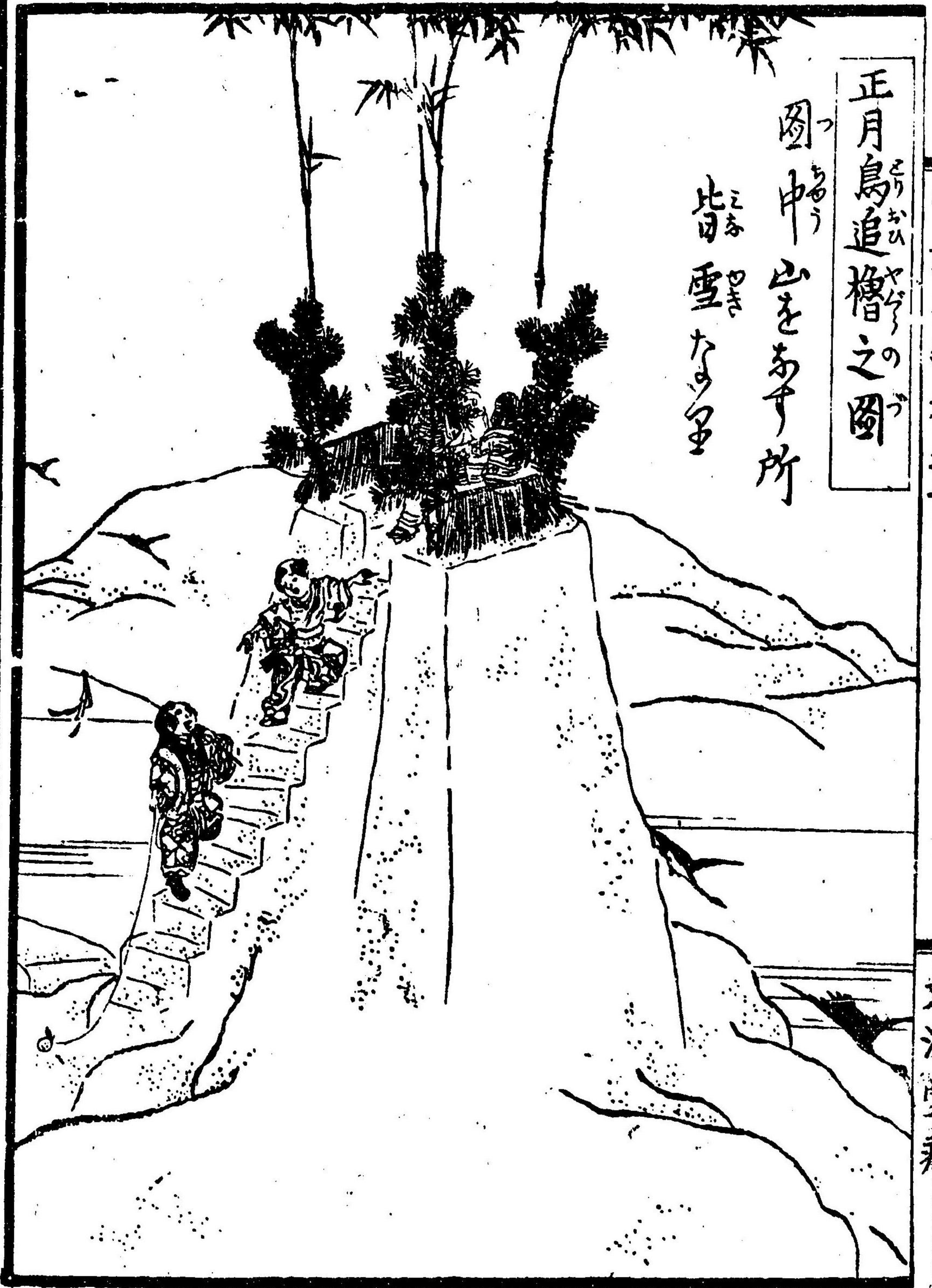
地獄谷遠然極樂世界とのまじり此妓をを養ふ主人もつゝ小
 來り居て従ふ料理人小具一なる魚菜を調味をせしむる小
 宴を開く是主人俗中の雅を挾ぐ恒小文人を推慕ゆふ小具
 日もつゝ小來りて余小面識をもるを岩居小約せしむる此人觀多
 のある自ら双坡樓と家号をもとの滑稽比一をりて知るべし飄逸
 洒落の小しき一しよ一人小愛せしむる家の前後小坡ありて双坡の字
 下し得て妙あり双坡樓扇をのびて余小句をもふ妓も持して
 扇を出て京水画をる一余即真を書きこころを見しむる岩居を
 せしむるめく一壁小句を題し更小風雅の真をまのりしるがごと
 く日小傾きけしむる帰路を促しける小哥妓も草鞋も來
 りしむるしむるかゝのもののしむるしむるしむるしむるしむる
 ときりつゝしむる酔真のしむる噪鬧しむる途を行く細流あり所小

のしむる紅唇粉面の哥妓紅視を褰て湧る花姿柳腰の美人
 等しむるしむる水をしむるしむる余が江戸の目め最珍らしむる真
 あり醉客らんとしむるしむる酔妓歩く躍る古縄を蛇と一駭せむ
 ときりつゝしむる妓愕しむる片足泥田しむるしむるしむるしむるしむる
 途ハ凡て農業の通路ありしむるしむる茶店も半途小至りて
 古き社小入りてしむるしむる一妓社の后小入りしむるしむる石の水盤の
 流るる水を僅小掬手を洗むしむる私小去りしむるしむる樹下小
 立せ玉ふ石地藏弁の前小並びにちまぐしむる懐中より鏡を出て鉛粉
 のしむるしむるしむるしむるしむるしむるしむるしむるしむるしむる
 りしむる石佛の頭小置り外面女弁内心如夜又のしむるしむるしむるしむる
 のしむるしむるしむるしむるしむるしむるしむるしむるしむるしむる
 しむるしむるしむるしむるしむるしむるしむるしむるしむるしむるしむる
 北紀行別小一本のしむるしむるしむるしむるしむるしむるしむるしむるしむるしむるしむる

正月鳥追櫓之圖

圖中 山をあす所

比 雪 たゞり



圖

新年都未芳

華二月初鷺見

身奇白雪如嫌

去冬臘有穿庭

樹他飛雪

涼仙舟圖



○越後の人物

板額いたがくぎ女むすめ加治明神山かじめいじんざんの城主まちぬし長太郎ながたろう祐森すけもりが室古志郡むろこしぐんの産うまひあり又三
 歳の小見こみも知しる酒頼しゆらい童子どうじハ蒲原郡ふはらぐん沙子塚村さしづかむらの産うまひ今猶屋敷跡いまなうやしきあと
 あり始はじハ雲上山うんぎやま国くに上かみ寺てらの行法印ぎやうぽういんの弟子でしあり玄翁げんそう和尚わうハ伊夜彦山いなひこざん
 の麓もと箭野村やのむらの産うまひあり近世ちんせいハはくく徳僧とくそう高僧かうそう和哥書画わかと書画の人もありハ
 一いもああららざざとと遠とほく四方よっぺ小雷こらい名なせせるるはは画人えいじん吳俊明ごしゆんめいのちハは近ち年ねん相さう
 撲く小越海こえつうみ鷲しゆ濱はまハ新あらた写ての産うまひ九枝龍くしげりゆうハ高田今町たかたけいままちの産うまひ閑戸まんとハ次つぎ弟あに濱はまの産うまひ也
 常つね人ひとめめるる力士りき士の聞きえありハ頭城郡あたまじやうじやうぐんの中野善右門なかのぜんごもん立石村たちいしむらの長兵衛ながへいゑ蒲
 原郡はらぐん三条さんじやうの三五さんご右みぎ門かど是等これら無双むすうの大力たからぢあり人の知しる所ところあり又鑑かん写てハ近ちき
 横戸村よことむらの長徳寺ながとくてら谷根村やねむらの行光寺ぎやうかうてらも怪力あまからぢのききえたりハ此人ここのひとハはくく
 も獨ひとりハはくく鐘かねをを軽かろくかろ掛かぎぎハはくくももわわのの力ちからハはくくありハ人ひとももあり又孝子かうじハ
 おおハはくくハ村上小次郎むらの上こしじらう新あらた癸田みづのたにの菊女頭城郡きくめづかみじやうじやうぐんの僧そう知良ちらう近ちくハ三さん鳴郡なりぐん村田

村むらの百ひゃく合ごう女むすめ百姓ひやくしやう伊兵衛いべゑ村むら門かど在あ門かど百姓ひやくしやう孫まご殿たみ塚原づかひらの豆腐賣とうふうり春
 松まつ兼かね永なが蒲原郡はらぐん釈迦塚しやくぢやづか村むら百姓ひやくしやう新あらた六むつハはくく孝子かうじの名な一ひと国くにハ高たかかりハ今
 存在ぞんざいハはくくももありハはくく

百樹ひゃくじゆ曰いは余われ越後えちごハはくく板額いたがくぎありハ酒頼しゆらい童子どうじの旧跡きうせきももたたげげハ新
 写てもも一ひと覽らんありハ名なの聞きええるる神佛かみぶつももたたげげハはくくハはくくハはくくハはくくハはくくハはくくハはくくハはくく
 順徳帝じゆんとくていの鳳跡ほうせき義經ぎけい夢函ゆまう国師こくし法然ほふぜん上人じやうじん日蓮にちれん上人じやうじん為兼たかかね卿遊女けいぎやうにむすめ初はつ
 君等きみらうの古跡こせきももたたげげハはくくハはくくハはくくハはくくハはくくハはくくハはくくハはくく
 ハ年ねん稍さう儉けんハはくく穀こくの價ねん目めハ小躍こあつり人氣じんぎ穩うまああららハ心こころ歸家きけハありハ
 風雅ふうがををううししああハ古跡こせきもも空くうハ過とほり准平じゆんぺいハはくくハはくくハはくくハはくくハはくくハはくく
 おおハはくくハはくくハはくくハはくくハはくくハはくくハはくくハはくくハはくくハはくくハはくくハはくくハはくく
 せせハはくくハはくくハはくくハはくくハはくくハはくくハはくくハはくくハはくくハはくくハはくくハはくくハはくくハはくく

○無縫塔

新編越後史下

ハ

新編越後史下

蒲原郡村松より東一里來迎村小寺あり永谷寺といふ曹洞宗あり此
 寺の近く小川あり早出川といふ寺より八町なり下小觀音堂ありその下
 を流る所を東光が洲といふ永谷寺(入院の住職あり此洲)血脈を投げ
 入る事先例ありさへ此永谷寺の住職遷化の前年此洲より墓の石ふ
 るの圓ま自然石を一つ岸小出は是を無縫塔と名づけつゝ此石出とバ
 その翌年必也住職病死する事むしりより今ふりて一度も違ひ
 する事あり此墓石大小小より住職の心小應せぬ洲(之せむその夜洲
 逆浪)住職のこのむ石を洲小出たる事度あり先年凡僧ら小
 住職一此石を見て死を懼と出奔せし翌年他国小ありて病死せしとを
 おのふ此洲小灵ありて天然の死を示せるべし友人北洋主人蒲原郡
見附の景
 文をよみ件の寺を覽る話本堂間口十間右小庫裏左小八間小五間の
 禪堂あり本堂ふりて阪の左り小鐘樓あり禪堂のうら小蓮池あり

上小坂あり登りて住職の墓所ありかの洲より出りて圓石を人
 作の石の墓の脚ありふのそと墓とを中央ありを関山とて左右小次
 第一とてサ三墓あり大なる徑り一尺三寸むり八九寸六七寸あり
 あり大小の和尚の徳小應むといひつゝふとを墓の高さらむとも一尺
 むりありと語らむとかの洲小灵ありといふむしり永光寺のや
 とり小貴人何某住玉ひ小その内室色情の妬あり夫をうらと東
 光が洲小身を沈め冤魂悪竜とありて人をも殺しを永光寺の関
 山名をきて血脈をうの洲小まつて化度一玉ひりぬ悪竜得脱あり
 その礼とてかの墓石を洲小ひりて死期を示す是以今ふりて
 も入院の時ハ洲小血脈を沈むと寺説ふつゝふとを○とて我が隣國信
 濃も無縫塔の事あり近江の石亭が雲根志ふりて前編灵信濃國
吳之部高井郡湯湯村横井温泉寺の前小星河とて幅三町をりの大阿

わりの温泉寺の住僧遷化の前年此河中何方よりと多く高さ
 二尺をよりある自然石の方小くうろくうろく石塔一ツ流さきつる突り
 彫刻せるごとくあり天然の物あり此石出ると土民も温泉寺へ去
 せる事ありきらあり翌年住僧遷化あり則ち此石を立す九代
 以前より始り一ヶ代九代の石塔同石同様あり少くも違はず並び
 あり或年の住僧此塔の出る時天を拜しこの我法華千部讀
 經の願あり今年ふり満り何と命を今年延し玉いと念
 してこの塔を川中の淵小投こたり何事もなく一年すき千部
 讀經のすこ一月小件の石又川中ふらり其翌年を延し遷化
 ありとこの次の住僧塔のゆる時何の程ひもなく淵へおけり
 幾度あげあがりて其夜そのふらり翌年病死ありとと
 此辺より是を無帽塔と名づく以上一條全文越後小永光寺信濃小温泉

寺事の相似する一奇怪といふ。○百樹曰牧之老人が此草稿を親
 て無縫塔の縫の字義通トぐり諸字ゆとて新示し問ひけ
 ば無縫塔と書傳らる。いふに雲根志の無帽塔とあり
 無帽の字も又通トぐりむとくは無望塔やあらん住僧の
 心あり死がらふ小無望塔ありとく無誓の一笑を記し博
 識の確拠を缺つ

○北高和尚

魚沼郡雲洞村雲洞庵ハ越後国四大寺の一なり四大寺と云滝谷の
 慈光寺あり村松の村上の耕雲寺伊弥彦の指月寺雲洞村の雲洞庵
 あり十三世通天和尚ハ霜堂君の親親籍ゆり高德の聞え六
 今も口碑小のこり景勝君も此寺小物字び玉ひとど一国の
 大寺のよ古文書宝物等も多しその中小火車落の袈裟と

りのあり香深の麻と見ゆる小血の痕のまじり是を火車落とく
 宝物とまると由來ハむ〜天正の頃雲洞庵十世北高和尚とのひ〜
 学徳全備の尊者ありしなり其頃此寺にあらはれた三郎九村の農家
 小死亡のりのありし小時〜も冬の雪ふりつぎ雪吹もあざりけり
 三四日の晴をもちて葬式をのぞくころ小晴ざりたるが強きころ
 をり〜且那寺のまじり北高和尚をもちて棺をひ〜親族ハさ〜
 人々羨望小雲があざりて送らぬころ雪途も半のりし時猛風
 俄小雲が黒雲穿布満て厩夜のぞく〜もあ〜火の玉飛来り
 棺の上ハ覆かり〜火の中ハ尾ハ〜またある稀有の大猫牙をもちし
 鼻をもち棺を目づけ〜とんと人々色を見〜棺を捨ちけり
 まろびつ逃ま〜北高和尚ハ〜も懐〜りろろ〜口ハ呪文を唱
 大声一喝〜鉄如意を奉〜籠つ〜大猫の頭をうち玉ひ〜ふから

や破とらん血や〜〜衣をけ〜妖怪ハ立地ハ逃去りけ
 る〜風も〜事〜葬式を〜寺の
 旧記ハの〜此時〜火車の法衣を今〜
 百樹曰余越遊〜塩澤ハ在〜時牧之老人ハ伴〜雲洞庵ハ
 い〜庵主ハ對話〜かの火車〜の袈裟〜人物
 その外の宝物古文書の類を〜一覽せり〜大寺あり祈禱
 の二字を大書〜堅額ハ・順徳院の震筆あり〜佐渡ハ
 震筆門前ハ直江山城守の制札あり放火私伐を禁むるの文あり
 庭中池のあり智勇の良将宇佐美駿河守双死の古墳在り〜を
 先年牧之老人施主〜新ハ墓全碑を建〜不朽の善行
 り〜
 本文ハ火車とりのハ所謂夜又〜夜又の怪ハ
 唐土の書あり〜散見せり
 ○羊賀の哥

余六十一遷曆の時年賀の書画を兼む吾國のさうり諸國の文人
 三郎の名家妓女排優來船清人の一絶をも得たりとる牧之の贈と
 りの更をさうりさうりの人より入らぬとて千餘幅のさうりの帖とて
 藏をひらきせきを風入とさうりこの鋪かつきたる坐しこの障子を
 年賀の帖を披き並ぶる所へ友人來り年賀の作意書画の評
 めりしつゝのさうりし頃禮の夫婦軒下我ら里言のいひ麻すとのりさけり吾々の家
 常の草鞋をさうりしをさうりける者も施をゆゑとて金をめりし
 此頃禮の翁うぢさうりし年賀の帖をさうりし見ゆる
 云々しつゝのさうりし頃禮の腰をさうりし申さんたさうりし
 とらふと食のさうりしをさうりしけりけりけりと思ひ
 めりし短尺たんせきさうりしをさうりしけり

三途川さんずがわ

三途川さんずがわの先さき百年ひゃくねんも君きみさうりしをさうりしけり

五放舍ごはうしゃ

とさうりしつゝのさうりしをさうりしけり
 趣向しゆかうとらひ頃禮ころんの五放舍ごはうしゃと戯たがひまてつる名もさうりしけり友人と俱ともふを
 ろの威いト宿やどを施行せぎやうせんゆゑものさうりしせんゆゑ友人もさうりし
 まりゆれと杖つゑをさうりしゆゑさうりしけり國の西國とさうりしけり
 ろのさうりしゆゑのさうりしけり

○逃入村にがひりむらの不思議ふしぎ

小千谷こぢやより一里いちりあまりの山手やまての逃入村にがひりむらとらあり
 塚つか小塚こつかとよぶく大小こお二ツの古墳こふん双ふたびあり所の傳ついでふ大あるを時平ときへいの塚つかに
 小あるを時平ときへいの夫人ふじんの塚つかとの時平ときへい大臣だいじん夫婦ふうふの塚つか比地ひぢ小在こあるゆ縁ゆゑあり
 ことら論ろんふる俗説よくせつありさうりしゆゑふしぎありとのふ
 ことら論ろんふる俗説よくせつありさうりしゆゑふしぎありとのふ
 ことら論ろんふる俗説よくせつありさうりしゆゑふしぎありとのふ
 ことら論ろんふる俗説よくせつありさうりしゆゑふしぎありとのふ

北高禪師勇氣圖



天満宮の崇めりて一村の人皆無筆あり他郷の身を寄て手習
 と崇めりて一村の村の書を進て字を忘と終て無筆
 とありてのゆゑふ文字の用ある時、他の村の者かたのて書用を舟を
 又此村の子どもも江戸土産とて錦繪をゆへる中、天満宮の繪
 めきつゝのゆゑ神の崇りての兆ありし事、度々ありしとて、まづかの大
 塚小塚を時平大臣夫婦の古墳ありと古くはひつゝあるも、何れ由縁あり
 事ありて、管家の筑紫ゆて薨て玉ひつゝ延喜三年二月廿五日あり
 今を去る事百樹曰く今とひひハ牧之老人が此まゝに文政三年をいふあり九百十五年、前あり今ふりて
 ても神天の明なる事ありて、尊むて、又とてふるのまゝ事
 あり、南路が東遊記を見、小南路東遊、津輕に居る時、六七日も
 風雨つゞき、所々の役人丹後の人や居ると、旅店毎ふまひ、
 のゆゑ南路ありて、そのゆゑを問ひけり、そのゆゑ、當国岩城ハ人の

ありて、安壽姫對王丸の生国あり、まづむの一人此御ありて、岩城山
 の神ふまひ、社今小在り此兄弟丹後ふまひ、三庄大夫が為小困苦
 するゆゑ、丹後の人をいひ、丹後の人此国ふまひ、大風雨有て
 日をこする事む、一よりの事あり、丹後の人此国の境をいひ、風雨なら
 ち、まづゆゑ、丹後の人や居ると、搜せあり、つゝと南路子此事小過
 ありとて記せり、右ふり、兄弟の父岩城判官正氏在京の時、諺ふあり、
 家の亡び、永保年中の事あり、今を去る事む、七十七百五十余年之
 兄弟の怨魂今小消滅せざる事、人知を以論、百樹曰く安壽對王丸妻あり、此處西遊記編景清が塚ハ日向あり、世の知る処あり、其母の塚ハ肥後国杵麻
 の人吉の城下より五六里、東切幡村、小まひ、此所小景清が娘の墳も
 あり、一村の氏神ふまひ、此村あり、盲人を忌む、盲人他処より入る、
 必崇あり、景清後小盲人あり、ゆゑ母の盲人を嫌ふ、と所の人の

りつ記せりてその変逃入村の不思議類せりありてその件
ニッ社ありて丹後の人を忌墓ありて盲人をさらふあり逃入村
墳ありて天満宮の神霊此地を忌玉へんを考ふる
かの古墳いよ〜時平が血脈の人あり〜

百樹曰余越遊〜小千谷小存〜時所入逃入村の事を語
りてその古墳を見玉〜案内を〜〜管神の〜玉ふ
所〜文墨の者強〜ゆ〜話〜の〜ゆ
がりきま〜天神様と〜三歳の小児〜尊び時平ときけバ此
御神を諷言〜なる悪人あり〜其悪干さふ上下〜歌舞妓
狂言の作り〜婦女子〜普〜知る所〜童稚女子ハその
實跡を志〜稀あり〜冊子ハ此
御神の事を記〜逃入村の因〜

書載

○謹や案〜小菅原の本姓ハ土師あり〜土師の古人と〜

先仁帝の御時大和国菅原と〜所小住〜もあふ土師の姓を

原小改らる管神御名ハ道實字ハ三童名を阿呼と〜阿呼の

余が考あれ〜仁明帝小仕玉〜文章博士参議是善卿の第三の

御子兼和十二年小生玉〜七歳の時紅梅を御覽〜梅の花

紅脂のいろを似〜我阿古〜類ゆ〜けり〜十一の春〜父君

より月下梅との詩の題を玉〜時御坐小月輝如晴雪梅花似

照皇〜可憐金鏡轉庭上玉房馨〜御祖父清御父卿の学業

を受嗣玉〜文藝〜の武事〜疎〜

○清和天皇の貞観元年御年十五〜御元服同四年文章生小
拳ら且下野の権掾〜同十四年御年廿八御母伴氏身

まろり玉ひ陽成天皇の元慶四年八月晦日御父是善卿も身まろり

玉ひ御年九此時 管神の御年四十一あり 寛平四年御年四十八

類聚国史二百巻を撰り玉ふ和哥の管家御集一卷詩文の管家文章

十二巻同後草一卷後草ハ執筆今も世に傳ふ大納言公任卿の朝詠集の

入とくともる 管家の詩小「送春不用動舟車 唯別殘鶯与落花

若使韶光知我意 今宵旅宿在詩家」此御作ハ 延喜帝のまろり

東宮より時令旨ありて一時の間十首の詩を作り玉ひる其一ツ

あり○まろり御若年より數階を歴りて後寛平九年御年五十三

權大納言右□將を兼らる此時時平大納言公任ざりて左□將を兼

管神と並び立ち執政より此時大臣の官ありしゆゑ大納言め執政

より此年七月三日 宇多帝御位を太子敦仁親王譲り玉ひ朱雀

院入らせ玉ひ亭子院と申奉り御法体ありて 寛平法皇とぞ

申奉る 敦仁親王を醍醐天皇とて後よりハ延喜帝とて申奉る

御年十三 年号を昌泰と改元を同二年時平公左□臣 管神右□臣

相俱ふ 帝を補佐し奉らる時小時平公二十七 管神五十四兩公

左右の□臣とていふも才徳半齡双璧とていふ故心組詰りて相

和せども是 管神の諷毒を得玉ふの張本あり○ともり時平公ハ

大職冠九代の孫照宣公の嫡男ありて代り□臣の家柄ありてその

ありて 延喜帝の皇后の兄ありてそのあり若年かして□臣の貴

重小職しりあり此人の乱行の二ツを言ハ叔父たる大納言国経卿ハ年

老叔母より北の方ハ年若く業平の孫女ありて絶世の美人あり時平

是の意くまて夫人もまろり夫の老るを嫌ふの心あり時平或日国経の

許ふ宴ハ醉興ありて夫人を貫りんとしひを国経も醉

とて戲言とていふことありてさへ国経ハ醉臥する事ありて叔

母を車かひりて入るる立上りの此腹か生さるるを中納言教忠といひ
 時平の不道此一を以て其餘を知るべしかか不道の人ありて
 寛平法皇の御心より時平の任を除きて 菅神御一人の国政
 をまうせ玉りしとのむがりしむ延喜元年正月三日
 帝高子院の朝觀のさしつゝ御内心を示し玉ひし帝は
 とふまじひ玉ひ其日 菅神を高子院めりし事のようにを
 内勅ありし 菅神固辞しなむし許し玉ひたりけり
 同月七日は二 比密事しつゝ時平公の聞かざるし事先
 帝は詔をまうし君の御弟齊世親王の道實の女を室
 適し 電遇厚し是以君を祭し親王を立国柄を一人の手
 か握んとの密謀あり 法皇も是の應じ玉ひの風説ありと
 言をひりし 時平延喜帝御年十七のり 白玉后の

時平公の妹ありて内外より讒毒を流し若帝の御心を動し
 奉りしつゝあり 〇とて時平が毒奏しあち中りて同月廿五日左降の
 宜旨下りて右口臣の職を削り從二位のりて大宰權帥と
 文統紫の左遷ふ定め玉り 寛平法皇此事を聞りて大かむ
 ろるるの御車あり玉りて俄か御咎をまめ玉ひて清涼殿
 かませ玉ひ斯とやせしむるありしとて左右の諸陣警固し事
 を通せども是の時平の讒の味も菅根の朝臣がよむしとや
 法皇の草壁玉ひ終日庭上の御し晩かひつゝもみり本院の遣口
 玉ひの菅神の御子二十三人をせり御男子四人の四方に流し玉ひ
 是の時平の毒告めしつゝの姫は都かきまの幼きつゝ筑
 紫のまじひのつゝ年頃愛玉ひる梅は別道ををりしなむし
 東風吹く白ひをまき梅の花は春の志を此梅つゝ

三年延喜三月延喜三年正月の頃より 御心例ありて二月廿五日
 太宰府延喜御薨御玉より御年五十九御墓ハ府内ちりて四ツ辻といふ所
 小定め 御棺をいづりたる途中小まきりてうごくと別所の所不
 葬を奉る今の 神延喜是あり。延喜五年八月十九日同所安樂寺
 小始り 菅神の神殿を建り味酒の安行といふ人は是をうけ
 たり同九年神殿成り是よりさき四人の御子配流をゆきさき
 玉ひかの故の位延喜は玉ふ。神去玉ひのち水旱風雷の天
 寶志をくわの人の心安きと是ぞ 菅公の崇りありんると
 風説さけりともや。菅神延喜去より七年小ありて延喜九年
 四月左延喜臣藤原時平公薨じ歳三十九又一男八条の大將保忠その
 弟中納言敦忠をび時平の女延喜の孫の東宮までも相つきて
 覺せらる又時平の諺毒延喜小荷贍ある菅根の朝臣ハ延喜八年十月

死延喜を世の華とよまむ。菅神の崇ありとせし流布せしハ
 菅公の冤譎を世の人哀感するゆゑともや。延長元年三月保
 明太子延喜薨去時平の孫。○同年四月廿日贈位正二位本官の右延喜臣
 小復一玉神。○一条院の御時正曆四年五月廿一日
 菅神小正位左延喜臣を贈り。○同年閏十月十九日
 大政延喜臣を贈らるる事此 御神の御位ハ正一位大政延喜臣とありて
 後年延喜 神延喜の赫たる徴ありてふよりて 天満宮 或
 自在天神の贈称あり。○ともく醍醐天皇延喜百廿代の御皇
 統の中も珠延喜御徳達よりゆゑ延喜の聖代と称し御在位の
 久りゆゑ 延喜帝とも中奉る 御若冠の時延喜賢者
 の聞えある重臣の 菅公を時平大臣延喜一時の諛口を信し玉ひて
 其實延喜を礼し玉ふと卒示小菅公を左遷ありて御一代の

失徳とやらむとあるを 菅神の恨と玉ひびりハ配所の詩哥ハ
 てもあつゝ 菅神ハうらむ玉ひびり賢徳忠臣の冤誦を天のい
 きどわりて水旱風雷の異変諺者奸人の死亡ありしゆん俗子ハ是
 を菅神の怨天とさるハ是又菅神の賢行ハ瑾つけありとされ
 ども竊ハ謂く賢者ハ旧悪をかりとらる事ハこととらる冤誦
 慄然のあまり諛言の首唱する時平大臣を社中ハ深く恨と玉ひ
 しもあつゝ本編ハりハ逃入村を神の忌玉と其徴とさるの
 一ツもアハ神去り玉ひりよりサ八年の後延長八年六月廿六日
 大雷清涼殿ハ墮て藤原清貫大内平稀世右中其外時候の人々
 雷火ハ即死を 延喜帝常寧殿ハ渡御ありて雷火を避たまふ
 是をも 菅神の崇とさるハいよく非説ありと安齋先生伊勢の
 管像辨イセもりりハ太宰府より一里西ハ天祥山あり 菅神ハの

山ハのりて朝廷を怨む告文を天ハ捧ぐ祈り雷神とあり
 玉ひりとのハ賢徳の脚心をあつゝ俗子の妄説を今ハ傳へた
 あり和漢三文書會ハ實ハサハ記ハハ不出門行の脚作ハ
 心を深めざるやあらんハ法性坊尊意山ハ在時 菅神の
 幽冥来り我冤誦の風懟を償とを願くハ師の道力をりて拒こと
 ありれ尊意曰卒士ハ皆王民あり我ハ皇の詔をうけ玉ひりを
 避るハ所あり 菅神作色あり適柘榴を薦 菅神哺を吐く
 焰をうけ玉ひりとのハ故事ハ元亨釈書の妄説ハ起此書ハ今天保
 廿年前元亨二年東福寺の虎関和尚の作ありハ奇怪の事を記すハ佛者の筆跡ありと安
 齋先生もりりハ白太夫とのハ伊勢渡會の神職 菅神文墨ハ於
 格外的の懇友ありゆゑハ北野ハ祀りて今も社あり 此脚神の事を作
 松王櫻丸の名ハハ梅ハ飛の脚哥ハ りたる俗曲ハ梅王 北野の脚社の始ハ天慶五年六月九日より

勅命ふよりて建創其起り西の京七條に住する文子との女小神
 訛ありしよりくあり北野縁起○世に渡唐の天神とひて唐服小
 梅花一枝を持玉を画し故事ハ佛鑑禪師聖二国師とあり名を東福寺の閉山国師号の始祖
 博多小住玉ひたる跡の地中より掘いぐる石小菅神の灵唐
 土に渡り玉ひて經山寺の無準禪師の師なり法を受玉ひて日本へ
 歸り玉ひると伴の石小彫つけありと古書小見えたるを拠とて
 渡唐の神影を画し傳へたるあり此事固妄説ありと安齋先生の
 菅像辨ふり菅家聖唐傳曆との入書の附録小沙門師高○菅神
 左遷の實跡を載するハ日本紀畧抄録小卷序扶桑畧記卷日本史
 百の列傳九十五○菅家御傳記神統菅原陳恆朝臣御作其餘虚實混合し
 たる古今の書籍救峯とて○本朝文粹小奉する大江匡衡の
 文小「天満自在天神或ハ塩梅於天下輔導一人帝の或日月於天

上照臨萬民就中文道之大祖風月之本主也」云大江家ハ
 菅原家と俱小朝廷小累世たる儒臣ありたる小菅神を宗
 稱する事件の文の如く是以凡文道小関者此御神を崇あがめせり
 んや信ぜざらんや○おとを菅神を祀る社ありやく雷除の護
 府との物あり此御神雷の浮名をうけ玉ひたるゆゑ 神灵雷
 を忌玉ふゆゑ小此まじりるを験あるべし○さへ如件條説するハ
 本編小りて逃入村の 神灵の事小因り實跡の書小を摘要し
 て御神の畧傳を見曹小示るあり固小学のまをるゝ要跡の
 漏るるも説の誤謬たるもあらずつと謹心附記を○再按る小
 孔子の聖なるもその灵ハ生る時より昭然とてその墓十里
 荆棘を生ぜども鳥も巢をむまざる関羽の賢あるも死してハ神と
 ありて新小應を是別生ハ形を以て運り死てハ神を以て運る



七ツ釜之図



のりといふや丈海披沙 菅神も此論ふ近逃入村の事を以ても千年
 ふちりた神の赫くくること仰うやふて敬うやふて蓋は冥みくる年月を
 置おむとまひバ百年も猶なほ一日の如くある一
菅公の神霊よりなる事和漢
 小多一まのかをさらる事なり

○田代の七ッ釜

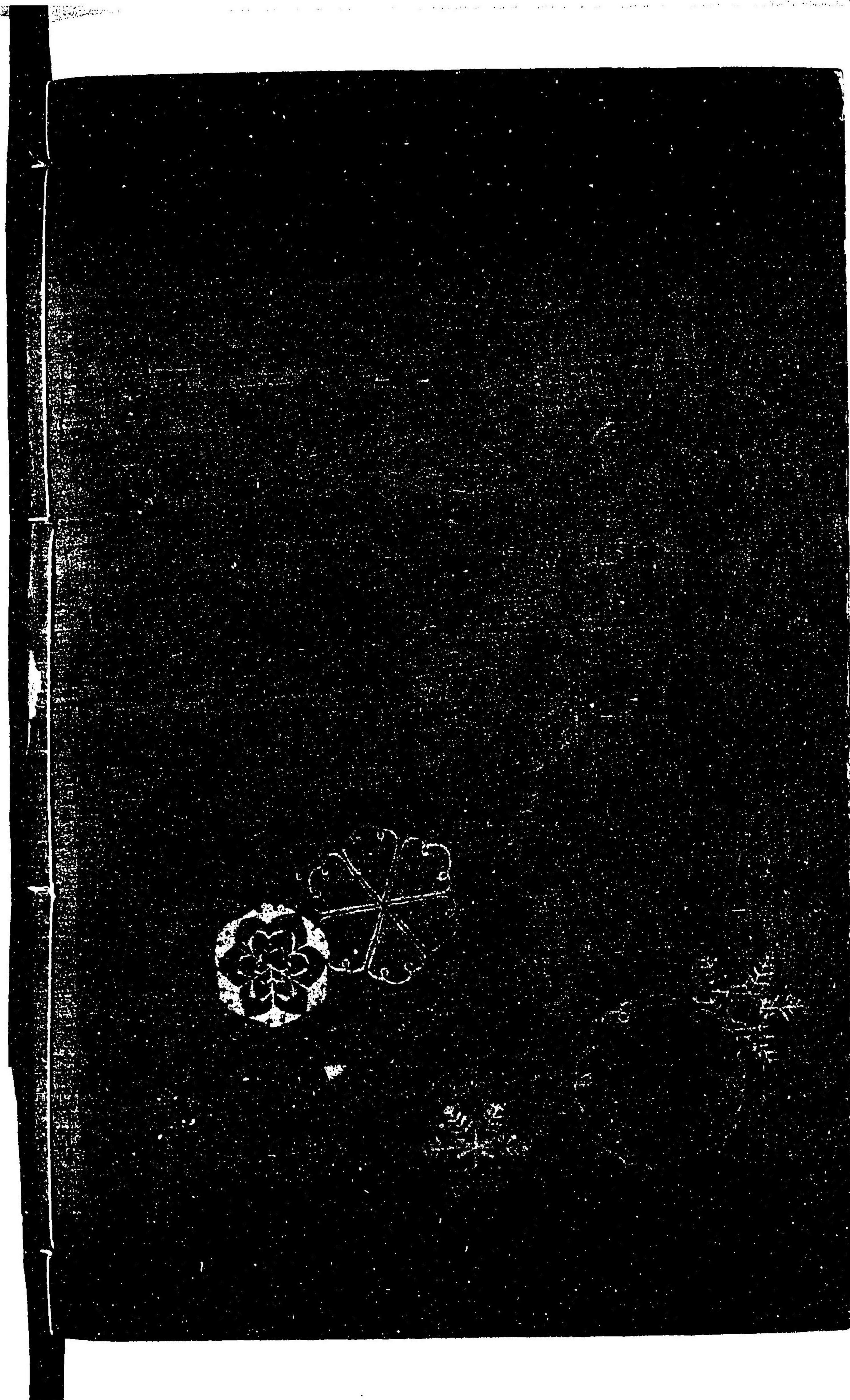
魚沼郡の官驛十日町の南七里計妻在庄の山中此へ入まず不田代といふ
 村あり村を去事七八町ふ七ッ釜といふ所あり里俗滝つたを釜といふ 滝七段あり由ゆき
 七ッ釜といひきてより 銚子の口不動滝ありいも七ッ釜の内あり妙景
 奇状筆をとりて云うぐも第七番目の釜の地景を爰こに圖ずるをとり
 其大槩をあるて此所の絶壁を堅御号横御号といふ里俗伊勢よ
 り御師の持きてるいもい箱をとりさまといふ此絶壁の石の箱の
 状かみ似るをのり斯からありその似かりといふ此せの釜の石とこの
 落おちるあるを視みば厚あさ六七寸計かりへ平ひらみあり長ながさ六二四尺をとり

長短ハひととうとうと石工の作りまじらるが如し此石數百方を堅い積つ重かさんで
 此數十丈の絶壁をあると頂たかい山のつままと老樹鬱然たり是右の方の
 堅御かりあり左ひだりに此石の寸尺すんふたたるる石を横よこ積つるもて數十
 丈をあると事右小同とそのまま人ありと行いくつもあげらること
 寸分の斜かちも天然てん然ぜんの奇工奇ま妙ま不可思議あり此石の落おちるを
 此田代村の者ものさらるる物の用もちふ片石かたもも他所たらいの用もちふと崇たかありし
 事こと度たびくらいとも余よ文政三年辰七月二日此七ッ釜の奇景を尋たり目
 撃うちたるを記して天の范はちくる他国も是こ似にる所ありと姑あくその
 類るを示しす○百樹曰余仕しふ在あり時同藩の文學関先生の話はなひ
 君侯封内の丹波山ふ天然てん然ぜん磨らの状かたる石をつともあげらる柱のやうあり
 を並ならべて絶壁をとり満山此石ありともあげらると又西国の山ふ人の作りたる
 かりある磨らの状かの石を産うる所ありと春暉はるが隨筆ずいみと見まる事

ありき今その所をいひつらまじ

○又尾張の名古屋の人吉田重房が著する鏡紫記行巻の
九小但馬國多氣郡納屋村より川船ゆく但馬の温泉小抵る途
中を記する條ふ曰く猶舟ふのりて行右の方小愛宕山宮島村
野上村石山地名を過り追續くあり此石山の川岸小臨する所小奇しき
石あり其形も磨礫の如く上下平ふりて周ハ三角四角五角八角
等小く石工の切立り如く色ハ青黒し是を掘出りて跡もありて
洞のごとく天下の廣きふの珍奇なる事ありきものありけり
是も奇石の類ありて筆の次ふあり

北越雪譜二編卷之三



139
7
146

東 京 圖 書 館				
七 冊	一 四 六 號	一 架	二 函	地 理 類
				和 書 門

